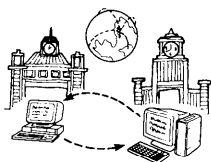


## 巻頭言



### 世界的市場競争時代における我が国の情報産業

池田 俊明†



バブル経済崩壊以来、本会に関連する情報産業も、ご承知のように低迷を続けている。最近の見通しでも「地をはうような回復」である。これは経済不況のみが原因でなく、情報産業構造変化に起因するところが大きいと思われる。俗に言う、「ダウンサイジング」や「CSS」へ情報システム構造が調整過程にあるからであろう。

このオープン化の進展により情報産業は世界市場への大競争時代に突入しており、世界のライバルを相手に無限のチャンスとリスクが存在している方向に歩み始めた。さらに事業運営は日本市場だけを対象にする事業から世界市場で通用する事業に変貌して行かなければならない。これは世界の資源を有効活用し、スピーディに世界市場のニーズに答えることが世界での大競争に勝ち抜くことに通じる。しかし、現在ここに情報産業企業自身の調整、転換への苦しみが存在している。

我が国の情報産業からそれを取りまく世界経済に目を転じてみる。これは世界経済の大変革すなわち社会主義経済圏の崩壊が、我々の情報産業に多大の影響を与えていると考えるからである。すなわち、安い労働力の供給と優秀な人材の活用可能性により世界的な労働力利用の変化をもたらしつつあること。さらに通信技術を活用して経営資本と技術が世界的な最適配置を求め、国際的な広がりを見せ始めていることにその現象が現れている。これはいかなる企業でも世界の安い労働力と優秀な人材を用いて、どこでも、何でも開発や製造ができる状況になりつつあるということの意味する。PCの生産状況はこの良い例である。その結果「国際的価格破壊」と「優秀な人材の流動化」および「世界的規模での企業の再編成とアライアンス競争」が起きている。社会主義経済圏の崩壊により従来の自由主義経済圏が一挙に3～4倍に拡大したのが唯一のメリットだが、またまた価格競争のみの事業運営ではその市場の大きさも直ち

に飽和してしまうことになろう。この世界経済構造変化を認識して、今後の我が国の情報産業の対応を従来の視点ではなく、新たな視座から考えて行かねばならぬ。

さて「CSS」の行き着くところはエンドユーザーコンピューティングであろう。コンピュータからの情報を活用し、判断し、自律的に行動する組織形態を前提にしている。狩猟民族ならいざ知らず、日本的農耕民族の組織には合わないなどと言っていられない。何故なら、情報処理を通じて各々の個人が意見を持つ組織を目指しているからである。この形態でないと機動的に連携を保ったフラットな組織が作れない。また事業運営も今日の生産技術重視から開発技術重視に行かなければならぬ。我が国の情報産業企業は先例を見てそれを如何に安価で高品質に作るかを考えてきた。これからはフロンティアとして「これぞ日本の情報産業企業」と言えるものを開発する必要がある。分野を切り開き、新たに確立することが重要な時代になってきた。シェア拡大重視から利益率重視に経営を切り替える時代でもある。

本学会に関連し我が国の情報産業に携わる大学、企業及び学生の人々がこの構造大変革に鋭敏になり、環境変化の本質を深く理解しないと、日本の情報産業企業は厳しい世界の競争に勝ち抜けない。個人の知力とスキルが情報ネットワークにより活用できる社会構造、環境が重要と考える。この社会環境を指向するためには、人材教育、組織における対個人評価方法、ネットワークインフラ整備、水平型産業組織化など産業社会全体に及ぶ変革が必要である。我が国の産業の中における情報産業の位置付け及び将来を考えると、情報産業自身に携わる者が先導を切って社会構造、環境を変革して行かなければならないと思うが、本学会の皆様はどのように考えておられるだろうか。

(平成7年1月10日)

† 本会財務担当理事 (株)日立製作所